

Title	『世説新語』の劉孝標注にみえる子部の佚書と類書所収の佚文との比較研究
Sub Title	A comparative study between the lost books of Zibu (子部) cited in Liu Xiaobiao's annotations of Shi shuo Xin yu and the lost texts in the leishu (類書)
Author	福田, 文彬(Fukuda, Fumiaki)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2019
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.116, (2019. 6) ,p.19 (246)- 36 (229)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01160001-0019

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『世説新語』の劉孝標注にみえる子部の佚書と類書所収の佚文との比較研究

福田 文彬

一、はじめに

六朝梁の劉孝標は『世説新語』（六朝宋・劉義慶撰）の正文に対して膨大な分量の注を附している。これは、劉孝標が史学の立場から『三国志』の裴松之注の注釈方法を踏襲し、正文に対する記事の補足や文意の解釈、及び誤謬の指摘をする際に多くの書籍や史料を引用していることに起因する。^① 劉孝標注に引用された文献資料は併せて四百種から五百種に及び、その中には佚書も多く含まれているため、劉孝標注は資料的な側面からも貴重視されている。^② 劉孝標注所収の引用書の点数について、著者はかつて史部と子部の書籍を整理・分類したことがある。^③ その結果、史部の書籍は計263種（佚書は250種）、子部の書籍は計56種（佚書は31種）引用されていることが分かった。^④

著者はこれまで史部や子部の書籍を引用している劉孝標注と現在通行している史部や子部の書籍の本文を比較し、大多数の劉孝標注が原書をそのまま引用しておらず、改変や省略、または要約等の処置を加えて引用していることを確認した。^⑤ ただし、先の研究においては現存する書籍からの引用のみを研究対象とし、劉孝標注にみえる引用書の大部分を占める佚書や

輯佚書からの引用は取り扱わなかった。

そこで、本稿では、子部の佚書や輯佚書を引用している劉孝標注を研究対象として、劉孝標注所引の子部の佚書や輯佚書の本文と唐代・宋代の類書に収められている子部の佚書や輯佚書の本文との比較を通して、文字の異同を考察し、劉孝標注と類書との関係を明らかにすることを試みる。

二、劉孝標注にみえる子部の引用書

劉孝標注に引用されている子部の書籍の書名とその引用箇所数については、すでに拙論『世説新語』の劉孝標注にみえる子部の引用書と通行本との比較研究⁵⁾において明らかにした。しかし、今回改めて劉孝標注所引の子部の書籍を整理・分類した結果、聊か遺漏が見つかったため、左記に子部の引用書の書名と引用箇所数を示した。分類については、上海図書館編『中國叢書綜録』の子目分類目録に準じ、孫啓治・陳建華編『古佚書輯本目録（附考證）』、姚振宗『隋書經籍志考證』⁶⁾、及び興膳宏・川合康三『隋書經籍志詳攷』⁷⁾等を参照した。

〈周秦諸子類〉

『孔子家語』 4箇所 『老子』 2箇所 『老子』 王弼注 1箇所 『莊子』 13箇所 『莊子』 司馬彪注 1箇所
『莊子』 郭象注 1箇所 『列子』 1箇所 『韓非子』 1箇所 『墨子』 1箇所 『尸子』 1箇所 『呂氏春秋』 3箇所
『神農書』 1箇所

〈儒學類〉

『孔叢子』 1箇所 『新書』 1箇所 『說苑』 1箇所 『揚子法言』 1箇所 『揚子法言』 李軌注 1箇所
『典論』 1箇所 『法訓』 1箇所 『傅子』 3箇所 『家誠』⁸⁾ 1箇所

〈兵書類〉

『孫子』 1箇所

〈農家類〉

『相馬経』 1箇所 『相牛経』 3箇所¹⁰ 『相牛経』注 1箇所

〈医家類〉

『寒食散論』 1箇所 『神農本草経』 2箇所

〈曆算類〉

『周髀算経』 1箇所

〈術数類〉

『相冢書』¹¹ 1箇所 『相書』 1箇所

〈芸術類〉

『四体書勢』 1箇所 『琴操』 2箇所 『棋品』 2箇所

〈雑学類〉

『淮南子』 1箇所 『三將軍論』¹² 1箇所 『論衡』 1箇所 『蔣子万機論』 1箇所 『士緯』 1箇所 『広志』 1箇所

『養生論』 1箇所 『孔氏説林』 1箇所 『風俗通義』 1箇所

〈典故類〉

『博物志』 2箇所¹³

〈小説類〉

『魏晋世語』 15箇所 『語林』 39箇所¹⁴ 『雑語』¹⁵ 2箇所 『郭子』 1箇所 『妬記』 2箇所 『海内十洲記』 1箇所

『搜神記』 1箇所 『靈鬼志』 4箇所 『孔氏志怪』 5箇所 『異苑』 3箇所 『幽明録』 4箇所 『東方朔伝』 3箇所

『漢武故事』 1箇所

続いて、引用書の点数と引用箇所数を子部の細目別に整理すると、左記の通りとなる。

周秦諸子類（12種） 30箇所

儒学類（9種） 11箇所

兵書類（1種） 1箇所

農家類（3種） 5箇所

医家類（2種） 3箇所

曆算類（1種） 1箇所

術数類（2種） 2箇所

芸術類（3種） 5箇所

雑学類（9種） 9箇所

典故類（1種） 2箇所

小説類（13種） 81箇所

劉孝標注における子部の書籍からの引用状況を総括すると、引用書は計56種、引用箇所数は計150箇所となった。劉孝標注に最も多く引用された書籍は『語林』（39箇所）であり、次いで『魏晋世語』（15箇所）、『莊子』（15箇所）と続く。細目別に引用箇所数を見ると、小説類の書籍からの引用が殊に多く、全体の半数以上を占めている。引用状況に対する考察については、前掲の拙論を参照されたい。

また、劉孝標注にみえる子部の引用書を現存する書籍（以下、現存書と呼ぶ）・輯佚書・佚書に分類すると、現存書は20種、輯佚書は5種、佚書は31種となり、改めて佚書が多く引用されていることが確認できた。

三、劉孝標注と類書所収の佚文との比較・考察

本章では、子部の佚書や輯佚書を引用している劉孝標注と佚書や輯佚書の本文を比較する。しかし、佚書はすでに散佚し

てしまい、原書の形としては今日に伝わっておらず、輯佚書は過去に散佚した後再び佚文を輯めて復元されたが、原書の姿を留めているのか疑わしい。つまり、佚書や輯佚書の原書を用いて劉孝標注との比較を行うことは不可能である。従って、本稿では、佚書や輯佚書を多く収めている類書を用いて間接的に劉孝標注との比較を試みることにした。ただし、類書を取り扱う際には、類書自体が果たして佚書や輯佚書を正確に採録しているのかという点に留意しなければならない。

ところで、どうして類書を利用するに思い至ったのか。無論、類書には佚書や輯佚書が数多く収められており、文学や文献学の研究において類書は貴重な価値を有する書籍として認められているからである。しかし、この他にも理由がある。著者は以前に佚書や輯佚書を引用している劉孝標注に対して幾許かの考察を加えた際、一部の劉孝標注と『太平御覧』所収の佚文との間に文字の一致が多く見られることを発見した¹⁸⁾。現存書を引用している劉孝標注には改変や省略等の手が数多く加えられ、現存書との間に文字の相違が多々生じている点から考えると、これは興味深い事象であると言いうことができる。そこで、著者は「この事象は、劉孝標が佚書や輯佚書をそのまま引用したために生じたのではなく、『太平御覧』を始めとする類書の編纂時に劉孝標注所引の佚書や輯佚書が引用されたために生じたのではないか」という仮説を立てた¹⁹⁾。従って、本稿では、劉孝標注と類書との間に引用被引用の関係が成り立つと仮定して、劉孝標注と類書所収の佚文との比較を行うことにした。なお、比較対象の類書については、唐代・宋代の代表的な類書である『芸文類聚』・『北堂書鈔』・『初学記』・『白氏六帖事類集』・『太平御覧』・『太平広記』を使用することとした。

はじめに、本稿で用いた『世説新語』劉孝標注と各類書の底本について紹介することにした。比較研究に用いる底本には、刊刻年代が古く、本文が正確で信用に足る善本を選定しなければならない。従って、『世説新語』については、最も古い刊本であり、且つ善本と称される「尊経閣蔵南宋紹興八年刊本」²⁰⁾を底本とした。また、各類書の底本についても可能な限り刊刻年代の古い刊本を選んだ。『芸文類聚』は「宋刻本」²¹⁾を、『北堂書鈔』は「清光緒十四年校宋刻本」²²⁾を、『初学記』は「明刊本」²³⁾を、『白氏六帖事類集』は「南宋紹興六年宋刻本」²⁴⁾を、『太平御覧』は「日本帝室図書寮京都東福寺東京岩崎氏静嘉堂文庫蔵宋刊本」²⁵⁾を、『太平広記』は「汪紹楹校点本」²⁶⁾をそれぞれ底本とした。

次に、研究対象の劉孝標注と比較対象の類書所収の佚文について述べることにする。研究対象は子部の佚書31種と輯佚書5種を引用している計110箇所⁽²⁷⁾の劉孝標注とした。一方、比較対象の類書所収の佚文については、上述の6種の類書の中から次の二つの条件を満たす佚文を抽出することにした。第一に、佚文に記載されている書名が劉孝標注所引の子部の佚書や輯佚書の書名と一致していること、第二に、佚文の内容が劉孝標注の内容と一致または類似していることである。以上の条件を満たす佚文を調査した結果、6種の類書の中から計90箇所⁽²⁸⁾の佚文を抽出することができた。類書別に抽出箇所数を見てみると、『芸文類聚』は10箇所、『北堂書鈔』は11箇所、『初学記』は10箇所、『白氏六帖事類集』は3箇所、『太平御覽』は54箇所、『太平広記』は2箇所となる。なお、子部の佚書や輯佚書を引用している劉孝標注は計110箇所であるが、前述の二つの条件を満たす佚文と対応する劉孝標注は45箇所であり、残りの65箇所の劉孝標注については、6種の類書の中において二つの条件を満たす佚文が無いことが分かった。稿末の附録「劉孝標注と類書所収の佚文との対応表」において、類書所収の佚文と対応する劉孝標注、及びその佚文の出典箇所を示したので、参照されたい。

続いて、劉孝標注と類書との間における引用被引用の関係の視点から類書所収の佚文を分析することを試みる。劉孝標注と6種の類書の中から抽出した佚文との対応状況を概観してみると、計90箇所の佚文を二つの種類に分けることが可能であることに気付いた。一つは、劉孝標注と内容が同一であり、文字の一致も多く見られる佚文である。これらの佚文については、類書が劉孝標注の全体或いは一部を引用した可能性があると言うことができる。もう一つは、劉孝標注と内容が類似しているが、文字の一致があまり見られない佚文、または劉孝標注には見えない内容を含んでいる佚文である。これらの佚文⁽³⁰⁾については、類書が劉孝標注を直接に引用した可能性は低いと見なすことができる。ここでは、前者をA群、後者をB群と呼ぶことにする。A群に属する佚文については、附録「劉孝標注と類書所収の佚文との対応表」において太字で示した。さて、上述の計90箇所の佚文をA群とB群に分類してみると、A群に属する佚文は32箇所、B群に属する佚文は58箇所となり、劉孝標注を引用した可能性のある佚文は全体の三分の一程度の数量に止まる結果が導き出された。しかし、上記の分類結果のみに依拠して、劉孝標注と類書との間には引用被引用の関係が成り立たないと結論付けるのは早計であろう。

そこで、先述の仮説の正否を見定めるため、劉孝標注とA群に属する佚文を比較し、文字の異同を考察することにした。劉孝標注と類書所収の佚文との比較を進めるに当たり、留意しておかなければならないことがある。それは、佚文が佚書や輯佚書の原書と同じ姿を留めているのか不明である点である。劉孝標注と現存書を比較した際には、現存書に記載されている文字を基準として劉孝標注の文字の異同を指摘する方法を採用した。しかし、劉孝標注と類書所収の佚文を比較する場合には、佚文に対して前述の疑義を差し挟む余地がある以上、類書所収の佚文を基準として劉孝標注の文字の異同を指摘することはできない。従って、ここでは劉孝標注の文字とA群に属する佚文の文字がどのくらい一致しているのかという観点から比較作業を行い、両者の一致率^①を算出し、劉孝標注と類書との間に引用被引用の関係が成り立ち得るのかを見極めようと試みた。劉孝標注とA群に属する佚文との比較を通して得られた一致率は左記の通りである^②。類書の略称表記については、稿末の附録に説明を記した。また、括弧内の字数は佚文の総字数を示している。

『莊子』司馬彪注（任誕篇45）	初14…約71%（34字）	『相牛經』（汰侈篇6）	初29…約89%（38字）	『養生論』（文学篇21）	御740…100%（5字）
御552…約79%（34字）	『典論』（巧芸篇1）	御899…約63%（63字）	御951…約82%（11字）	御954…80%（5字）	御981…80%（5字）
芸74…約61%（54字）	『法訓』（任誕篇45）	『相牛經』注（汰侈篇6）	初29…約65%（17字）	『博物志』（巧芸篇1）	御93…約86%（29字）
御755…約71%（52字）	北92…約54%（87字）	『三將軍論』（言語篇15）	芸17…約51%（118字）	御687…約86%（29字）	御971…約82%（11字）
初14…約56%（52字）	初14…約56%（52字）	北115…約18%（83字）	御552…50%（54字）	『蔣子万機論』（品藻篇2）	御716…約82%（11字）
『家誡』（德行篇15）	御552…50%（54字）	『博物志』（巧芸篇10）	御367…約74%（73字）	白9…75%（8字）	

『語林』（識鑑篇11）

御 684…約 87%（23 字）

『雜語』（仮譎篇1）

北 124… 55%（20 字）

『孔氏志怪』（自新篇1）

初 8…約 46%（28 字）

『語林』（容止篇7）

御 773…約 79%（34 字）

『妬記』（輕詆篇6）

御 353…約 58%（36 字）

『幽明録』（傷逝篇16）

御 371…約 85%（33 字）

『語林』（術解篇4）

御 836…約 94%（16 字）

芸 35…約 71%（248 字）

『幽明録』（術解篇3）

広 389…約 96%（46 字）

劉孝標注と32箇所のA群に属する佚文の一致率を見てみると、数値は総じて高くないことが分かる。最高値は100%、最低値は約18%、平均一致率は約63%である。一致率が100%の佚文が3箇所、90%の佚文が10箇所あるが、数値の高い事例の中には佚文の総字数が少ないものが含まれるので、一致率だけで劉孝標注と類書所収の佚文との関係を判断するには注意を要する。以上の比較結果を総括すると、劉孝標注とA群に属する佚文が完全に一致する事例はほとんど無いことが確認された。

さて、劉孝標注とA群に属する佚文との比較作業に関して言及しておきたいことがある。それは、欠字を多く含む佚文の存在である。欠字の発生とは、果たしてどのような事象であるのか。A群に属する佚文が劉孝標注を引用したと仮定するならば、それは劉孝標注の一部を省略したために生じた事象と見ることが出来る。そこで、佚文中の欠字が引用の際の省略によって生じたと推定して、劉孝標注とA群に属する佚文との類似率を算出した。結果は左記の通りである。括弧内の字数は佚文中の欠字の字数を示している。

『莊子』司馬彪注（任誕篇45）

初 14…約 83%（5 字）

芸 74…約 67%（5 字）

御 755…約 77%（4 字）

初 14…約 85%（18 字）

御 552…約 84%（22 字）

御 552… 90%（4 字）

『法訓』（任誕篇45）

北 92…約 87%（33 字）

『家誡』（德行篇15）

北 78…約 89%（3 字）

『典論』（巧芸篇1）

『相牛経』(汰修篇6)

初29…約92%(1字)

御899…約89%(18字)

『相牛経』注(汰修篇6)

初29…約73%(2字)

『三將軍論』(言語篇15)

芸17…約79%(42字)

北115…75%(63字)

『蔣子万機論』(品藻篇2)

御367…約87%(11字)

『養生論』(文学篇21)

御740…100%(0字)

御951…約82%(0字)

御954…80%(0字)

御981…80%(0字)

『博物志』(巧芸篇1)

御93…約93%(2字)

御687…約93%(2字)

御716…約82%(0字)

『博物志』(巧芸篇10)

白9…約86%(1字)

『語林』(識鑑篇11)

御684…約91%(1字)

『語林』(容止篇7)

御773…約82%(1字)

『語林』(術解篇4)

御836…100%(1字)

『雜語』(仮譎篇1)

北124…約58%(1字)

御353…約64%(3字)

『妬記』(輕詆篇6)

芸35…約85%(40字)

広272…約76%(104字)

『孔氏志怪』(自新篇1)

初8…約68%(9字)

『幽明録』(傷逝篇16)

御371…約90%(2字)

『幽明録』(術解篇3)

広389…約96%(0字)

劉孝標注と32箇所A群に属する佚文の類似率を見てみると、数値は先述の一致率よりも全体的に高くなっていることが分かる。最高値は100%、最低値は約58%、平均類似率は約83%である。類似率が高い事例としては、100%の佚文が9箇所、90%の佚文が14箇所見られ、七割以上のA群に属する佚文が80%以上の類似率であるという結果が導き出された。以上の比較結果を総括すると、劉孝標注と多数のA群に属する佚文が類似していることを具体的な数値によって明らかにすることができた。

それでは、上記の比較結果を踏まえ、結論を述べることとする。本稿では、類書を用いて間接的に劉孝標注と佚書や輯佚書の本文を比較することを試みた。その結果、劉孝標注とA群に属する佚文は完全には一致しないが、類似する点が多いこ

とを考察することができた。このような事象が生じた原因については、主に三つの仮説によって説明することができよう。

第一に、類書を編纂する際には、劉孝標注をそのまま引用したのではなく、省略や改変等の処置を加えて引用したという仮説である。一致率や類似率の数値が高い事例については、確かに第一の仮説を用いて説明することが可能である。しかし、一致率や類似率の数値が低い事例については、第一の仮説を用いて説明することは難しい。つまり、一部の劉孝標注とA群に属する佚文との間においては、引用被引用の関係が生じていた可能性はあるものの、第一の仮説に基づいて全ての事例を説明するのは困難である。

第二に、類書が編纂された時代には、現在では佚書や輯佚書となってしまった書籍がまだ存在していて、類書の編纂時には佚書や輯佚書の原書を利用したという仮説である。劉孝標注とA群に属する佚文が完全に一致しなかったのは、両者のいずれか、或いは両者ともに正確に佚書や輯佚書を引用しなかったために生じた事象であると推測することができる。第二の仮説の立証には、佚書や輯佚書がどの時代に散佚したのかを調べる必要がある。

第三に、類書を編纂する際には、他書に引用されている佚書や輯佚書の本文を利用したという仮説である。劉孝標注とA群に属する佚文が完全に一致しなかったのは、第二の仮説で述べた理由のほか、引用元の他書に誤りがあったと推測することができる。第三の仮説の立証には、類書所収の佚文と同じ内容を引いている他書が存在するのかを調べる必要がある。

最後に、劉孝標注と佚書や輯佚書との比較を通じて見えた劉孝標注の功績について一言触れておきたい。6種の類書の中から劉孝標注と類似する佚文を抽出する作業を行った際、65箇所劉孝標注に引用されている子部の佚書や輯佚書の本文については、類書の中から対応する佚文を見つけることができなかった。これは、翻って考えると、劉孝標注にみえる佚書や輯佚書の本文が唐代・宋代の代表的な6種の類書の中に採録されていなかったことである。幸いにも、これらの佚書や輯佚書の一部は劉孝標注の中に保存される形で後世に伝わったため、我々はこれらの佚書や輯佚書を垣間見ることができるのである。もちろん、劉孝標注が佚書や輯佚書を正確に引用しているのかという点については疑わしいため、劉孝標注所収の佚文を無批判に利用することには注意しなければならない。しかし、このような瑕疵を差し引いても、佚文を後世に伝

えたことは劉孝標注の功績と言っても過言ではない。

四、おわりに

本稿では、子部の佚書や輯佚書を引用している劉孝標注と類書所収の佚文を比較し、劉孝標注と類書との関係を明らかにすることを試みた。研究成果として左記の二点を挙げることができる。一つ目は、6種の類書の中から前章において述べた二つの条件を満たす佚文を抽出し、劉孝標注とA群に属する佚文との比較を通して一致率と類似率を算出した点である。これにより、両者が類似している事例は多く見られたが、完全に一致する事例はほとんど無いことを数値を用いて客観的に証明することができた。二つ目は、比較作業を通して得られた一致率と類似率の結果に拠って、劉孝標注とA群に属する佚文との間に引用被引用の関係が成立する可能性は低いことを見極めることができた点である。ただし、佚書や輯佚書を引用する全ての劉孝標注においても同様の傾向が見られるのかという点については、劉孝標注にみえる子部以外の佚書や輯佚書に対する考察を行った後に最終的な結論を導くことにしたい。

最後に、今後の研究課題として次の二点を指摘しておきたい。第一に、本稿では劉孝標注と類書との間に引用被引用の関係が成り立つと想定した著者の仮説を叩き台として、劉孝標注と類書所収の佚文との比較を行ったが、前章において述べたように、第一の仮説では全ての事象を説明することができないという結論が導き出された。また、類書所収の佚文との比較においては、A群に属する佚文のみを比較対象とし、B群に属する佚文に対する分析を行っておらず、これは本稿の不足点である。従って、今後の比較研究においては、類書所収の佚文に対するアプローチの方法を見直し、第二の仮説や第三の仮説の角度から劉孝標注と類書所収の佚文との比較を進め、分析を加えていかなければならない。この点については稿を改めて考察することにした。第二に、佚書や輯佚書を引用している劉孝標注の特徴を明らかにするには、やはり子部以外の経部・史部・集部の佚書や輯佚書も研究対象として考察を加えなければならない。また、根本的な問題として、比較方法についても改めて検討や改善が必要になると考える。本稿では一致率と類似率という方法を用いて劉孝標注と佚書や輯佚書の類

似性を明らかにしたが、劉孝標注自体の特徴を考究するまでには至らなかつた。そのため、より精度の高い比較方法や分析方法を案出することが目下の課題と言えよう。

注

- (1) 劉孝標注の注釈方法については、宮岸雄介「劉孝標の史学観——『世説新語注』における史料批評をめぐって——」(『富士大学紀要』第三二卷第二号、二〇〇〇年三月)、渡邊義浩「『世説新語』劉孝標注における「史」の方法」(『三国志研究』第十一号、二〇一六年九月)に詳しい。
- (2) 神田信夫・山根幸夫編『中国史籍解題辞典』(燎原書店、一九八九年)、及び竹田晃・黒田真美子編『世説新語(六朝Ⅱ)』(明治書院、中国古典小説選、二〇〇六年)、参照。
- (3) 拙論『世説新語』の劉孝標注にみえる子部の引用書と通行本との比較研究」(『藝文研究』第一〇七号、二〇一四年十二月)、及び拙論『世説新語』の劉孝標注にみえる史部の引用書と通行本との比較研究」(『慶應義塾中国文学会報』第一号、二〇一七年三月)、参照。なお、引用書の点数については、前掲の拙論において史部の書籍は計26種、子部の書籍は計41種と述べているが、誤りである。
- (4) 注(3) 前掲論文、参照。
- (5) 上海古籍出版社、一九八六年。
- (6) 中華書局、一九九七年。
- (7) 王承略・劉心明主編『二十五史藝文經籍志考補萃編 第十五卷』(清華大学出版社、二〇一四年)、参照。
- (8) 汲古書院、一九九五年。
- (9) 朱明勳『中國家訓史論稿』(巴蜀書社、二〇〇八年)第二章「漢魏六朝・家訓的發展期」第一節「漢魏六朝時期我國傳統家訓發展情況」三四頁において李秉「家誠」に言及した次の記述が見える。「漢至魏晉六朝時期的文獻性家訓到底有多少、到目前為止

還沒有人作過專門的統計。……而魏晉六朝時期的則・數量可觀、南北各地皆有、據文獻可考的、至少有80余篇。著名的如…諸葛亮的《誡子書》和《誡外甥書》、曹魏王修的《誡子書》、王肅的《家誡》、嵇康的《家誡》、王昶的《誡兒子及子書》、西晉李秉的《家誡》、……。」(原文は簡体字を使用)。

(10) 汰侈篇6の劉孝標注において「相牛經」(「相經」)の書名が見えるが、後掲の南宋紹興八年刊本は「柏經」に作っている。龔斌校釈『世說新語校釋』(上海古籍出版社、中国古典文学叢書、二〇一一年)は「相經、相、宋本誤作「柏」。」と指摘している。従って、当該箇所は「相牛經」からの引用として分類した。

(11) 蔡達峰『歴史的風水術』(上海科技教育出版社、一九九四年)第四章「擇居術的發展」第二節「魏晉擇居術」一、葬術の興盛與《葬經》九〇頁において青島子「相冢書」に言及した次の記述が見える。「《相冢書》之名在《世說新語》以前的文獻中還未見記載、但從內容來看、它是有由來的。從術法形成到流傳的一般過程看、在南北朝時期、《相冢書》已是葬術名作、……。」(原文は簡体字を使用)。

(12) 劉昫『旧唐書』経籍志は嚴尤「三將軍論」を雜家類に分類している。同じく雜家類に分類されている「淮南子」や「論衡」が前掲の上海図書館編『中國叢書綜録』においては雜学類に分類されているため、「三將軍論」も同様に雜学類に分類した。なお、劉昫『旧唐書』経籍志については、王承略・劉心明主編『二十五史藝文經籍志考補萃編 第十七卷』(清華大学出版社、二〇一三年)、参照。

(13) 巧芸篇1の劉孝標注において『博物志』の書名が見えるが、後掲の南宋紹興八年刊本は「博物記」に作っている。目加田誠『世說新語』(明治書院、新釈漢文大系、一九七五、一九七六、一九七八年)は「宋本には、『志』を『記』に作るが、『三国志』文帝紀の裴注に同じ文が引かれ、『博物志』(張華の著)に作るので袁本に従って『志』とした。」と指摘している。従って、当該箇所は『博物志』からの引用として分類した。

(14) 容止篇29の劉孝標注において『語林』の書名が見えるが、後掲の南宋紹興八年刊本は「書林」に作っている。前掲の龔斌校釈『世說新語校釋』は「語、宋本誤作「書」。」と指摘し、前掲の目加田誠『世說新語』は「宋本は『書林』に作る。いま袁本に拠った。」と指摘している。従って、当該箇所は『語林』からの引用として分類した。

(15) 石昌渝主編『中國古代小説總目 文言卷』(山西教育出版社、二〇〇四年)六五一頁において孫盛「雜語」の解題が記載されているため、小説類に分類した。なお、前掲の姚振宗『隋書經籍志考證』は小説家の細目において「雜語五卷 不著撰人」と記載している。

(16) 司馬彪注1箇所と郭象注1箇所を含む。

(17) 現存書・輯佚書・佚書の分類は、前掲の上海図書館編『中國叢書綜録』、孫啓治・陳建華編『古佚書輯本目録(附考證)』、神田信夫・山根幸夫編『中國史籍解題辭典』、及び近藤春雄『中國學芸大事典』(大修館書店、一九七八年)を参照して行った。輯佚書に分類した書籍(5種)と佚書に分類した書籍(31種)は左記の通りである。

〈輯佚書〉

『說苑』・『傅子』・『博物志』・『搜神記』・『漢武故事』

〈佚書〉

『莊子』司馬彪注・『尸子』・『神農書』・『典論』・『法訓』・『家誡』・『相馬經』・『相牛經』・『相牛經』注・『寒食散論』・『神農本草經』・『相家書』・『相書』・『四体書勢』・『琴操』・『棋品』・『三將軍論』・『蔣子方機論』・『士緯』・『広志』・

『養生論』・『孔氏説林』・『魏晉世語』・『語林』・『雜語』・『郭子』・『妬記』・『靈鬼志』・『孔氏志怪』・『幽明録』・『東方朔伝』

注(3) 前掲論文、参照。

(19) 『世説新語』の正文が類書に引用されている事例については、古田敬一「類書等所引世説新語について」(『広島大学文学部紀要』第三号、一九五三年二月)に詳しい。

(20) 育徳財団、一九二九年、影印本。『世説新語』の刊本については、余嘉錫氏が『世説新語箋疏』(中華書局、一九八三年)の凡例において次のように述べている。「世説新語傳流較早の刻本是南宋刻本。現在所知有三种…(1) 日本尊經閣叢刊中所影印的宋高宗紹興八年董莽刻本。…(2) 宋孝宗淳熙十五年陸游刻本。…(3) 清初徐乾學傳是樓所藏宋淳熙十六年湘中刻本。…三種宋刻本、以第一種董莽本最佳。」

(21) 新興書局、一九六九年、影印本、明刊本の補配あり。

(22) 新興書局、一九七一年、影印本。

(23) 新興書局、一九六六年、影印本。

(24) 新興書局、一九七五年、影印本。

(25) 四部叢刊三編所収、上海書店、一九八五年、影印本、商務印書館一九三六年版の重印本。

(26) 中華書局、一九六一年、排印本。本書は排印本であるが、明代の談刻本を底本として各種の版本や鈔本を用いて校勘しており、信用のおけるテキストである。

(27) 『太平御覽』卷367において『蔣子方機論』（『蔣濟方機論』）の書名が見えるが、前掲の宋刊本は「蔣齊萬機語」に作っている。佚文の内容が品藻篇2の劉孝標注所引の『蔣濟方機論』と類似しているため、これは宋刊本の誤刻であると考えた。従って、当該箇所は『蔣子方機論』からの引用と見なした。

(28) 『太平御覽』卷747において『魏晉世語』（『世語』）の書名が見えるが、前掲の宋刊本は「世論」に作っている。佚文の内容が巧芸篇4の劉孝標注所引の『世語』と類似しているため、これは宋刊本の誤刻であると考えた。従って、当該箇所は『魏晉世語』からの引用と見なした。

(29) 『太平御覽』卷353において『雜語』（『異同雜語』）の書名が見えるが、前掲の宋刊本は「異同難語」に作っている。佚文の内容が飯諺篇1の劉孝標注所引の『雜語』と類似しているため、これは宋刊本の誤刻であると考えた。従って、当該箇所は『雜語』からの引用と見なした。

(30) 劉孝標注とB群に属する佚文（文字の一致があまり見られない事例）

『世說新語』任誕篇34 劉孝標注

郭子曰、桓公糶菹、失數百斛米、求救於袁耽、耽在艮中、便云、大快。我必作采、卿但大喚。即脱其衰、共出門去。覺頭上有布帽、擲去、箸小帽。既戲、袁形勢呼袒、擲必盧雉。二人齊叫、敵家頃刻失數百萬也。

『太平御覽』卷754 工芸部十一 擣菹

郭子曰、桓公年少至貧、嘗擣菹、失數百斛米。齒既惡、意亦沮。自審不復振、乃請救於袁彦道。桓具以情告、袁欣然無忤、便即俱去、出門云、我不但拔卿、要爲卿破之。我必作快齒、卿但快喚。既戲、袁形勢呼咀慨牡、擲必盧雉。二人齊叫、敵家震懼喪氣。俄頃、獲數百萬。

劉孝標注とB群に属する佚文（劉孝標注には見えない内容を含んでいる事例）

『世說新語』規箴篇8 劉孝標注

語林曰、陽性遊俠、盛暑、一日詣數百家別。賓客與別、常填門、遂死于几下。故懼之。

『太平御覽』卷473 人事部一百一十四 遊俠

裴啓語林曰、李陽大俠、士庶無不傾心。爲幽州刺史、當之職、盛暑、一日詣數百家別。賓客常填門。

(31) 一致率とは、劉孝標注の文字と類書所収の佚文の文字がどのくらい一致しているのかを表す指標である。一致率は、佚文の総字数を分母とし、劉孝標注と一致した文字の字数を分子として算出した。また、引用範囲の中において欠字（劉孝標注には見え、

A群に属する佚文には見えない文字)があつた場合には、分母の総字数に欠字の字数を加算して一致率を算出した。なお、旧字や異体字、及び互いに通用する字は同字と見なした。

(32) 本来ならば、劉孝標注とA群に属する佚文を並べて文字の一致点や相違点を明示したいところであるが、紙幅の都合上、32箇所全ての佚文を掲載することはできない。従つて、二例を挙げるに止めた。なお、傍点は文字の相違点を、■は欠字を示す。

『世説新語』汰修篇6 劉孝標注

甯戚經曰、種頭欲得高、百體欲得緊、大膝疎肋難齡、龍頭突目欲好跳。又角欲得細、身欲促、形欲得如卷。

『初学記』卷29 獸部 牛第五

甯戚相牛經曰、種頭欲得高、百體欲得緊、大膝疎肋難齡、龍頭突目■好跳。又曰、角欲得細、身欲得促、形欲得如卷。

『世説新語』品藻篇2 劉孝標注

蔣濟萬機論曰、許子將褻貶不平、以拔樊子昭、而抑許文休。劉曄難曰、子昭拔自賈豎、年至七十、退能守靜、進不苟競。

濟答曰、子昭誠自幼至長、容貌完潔、然觀其挿齒牙、樹頰類、吐唇吻、自非文休之敵。

『太平御覽』卷367 人事部八 頰

蔣濟萬機論曰、許子將褻貶不平、以拔樊子昭、而抑許文休。劉曄■曰、子昭發自賈豎、年至耳順、退能守靜、進能■。濟答曰、子昭誠自長■幼、■完潔、然觀其挿■牙、樹頰■、■、自非文休■敵也。

(33) 平均一致率は、32箇所のA群に属する佚文の合計字数を分母とし、各箇所の佚文において劉孝標注と一致した文字の合計字数を分子として算出したものである。このような算出方法を用いた理由は、総字数の少ない佚文と多い佚文、具体的な事例を挙げる、と、総字数5字・一致字数5字の佚文(『太平御覽』卷740所収の『養生論』)と総字数²⁴⁸字・一致字数177字の佚文(『芸文類聚』卷35所収の『妬記』)を同列に扱つて平均値を算出することはできないからである。

(34) 類似率とは、劉孝標注と類書所収の佚文がどのくらい類似しているのかを表す指標である。類似率は、佚文の総字数から欠字の字数を減算した数を分母とし、劉孝標注と一致した文字の字数を分子として算出した。なお、旧字や異体字、及び互いに通用する字については、一致率を算出した場合と同じく同字と見なした。

(35) 平均類似率は、32箇所のA群に属する佚文の合計字数から各箇所の欠字の合計字数を差し引いた数を分母とし、各箇所の佚文において劉孝標注と一致した文字の合計字数を分子として算出したものである。

附録 劉孝標注と類書所収の佚文との対応表

〔莊子〕司馬彪注

任誕篇45…初14・御552

〔說苑〕

德行篇26…北53・御228・御395・御899

〔典論〕

巧芸篇1…芸74・御93・御592・御755

〔法訓〕

任誕篇45…北92・初14・御552

〔傅子〕

識鑑篇3…御447

〔家誡〕

德行篇15…北78・御430

〔相馬經〕

德行篇31…御896

〔相牛經〕

汰修篇6…御899

汰修篇6…初29

汰修篇6…初29・初29・御899

〔相牛經〕注

汰修篇6…初29

〔神農本草經〕

排調篇32…御989

險齋篇6…御991

〔琴操〕

言語篇6…御511

賢媛篇2…芸30・御483

〔三將軍論〕

言語篇15…芸17・北115

〔蔣子方機論〕

品藻篇2…御367

〔士緯〕

品藻篇1…御447

〔広志〕

汰修篇8…御807

〔養生論〕

文学篇21…芸75・御720・御740・御951・御954・御981

『博物志』

巧芸篇 1 : 北 136 ・ 御 93 ・ 御 687 ・ 御 716
巧芸篇 10 : 芸 74 ・ 白 9 ・ 御 753

『魏晉世語』

巧芸篇 4 : 御 747

『語林』

方正篇 31 : 北 134 ・ 御 805
雅量篇 22 : 御 951
識鑑篇 11 : 御 684
規箴篇 8 : 御 473
容止篇 7 : 初 19 ・ 御 773
傷逝篇 3 : 御 388 ・ 御 389 ・ 御 487 ・ 御 556
術解篇 4 : 御 836
巧芸篇 10 : 芸 74 ・ 御 753
寵礼篇 4 : 芸 50
任誕篇 28 : 御 497
任誕篇 43 : 北 92 ・ 初 14 ・ 御 389 ・ 御 552
任誕篇 50 : 北 94
汰侈篇 2 : 御 186 ・ 御 699
尤悔篇 3 : 芸 68 ・ 北 121 ・ 御 338 ・ 御 469 ・ 御 567

『雜語』

仮譎篇 1 : 北 124 ・ 御 353
〔郭子〕
任誕篇 34 : 御 754

〔妬記〕

賢媛篇 21 : 芸 18 ・ 白 6

輕詆篇 6 : 芸 35 ・ 広 272

〔孔氏志怪〕

自新篇 1 : 初 8

〔幽明録〕

傷逝篇 16 : 御 371

術解篇 3 : 御 369 ・ 広 389

〔東方朔伝〕

文学篇 61 : 北 108 ・ 初 16 ・ 白 18 ・ 御 575

・ 類書の書名は次のように表記を省略した。

〔芸文類聚〕…芸 〔北堂書鈔〕…北

〔初学記〕…初 〔白氏六帖事類集〕…白

〔太平御覧〕…御 〔太平広記〕…広

・ 類書の略称の下の数字は各類書の巻数を示している。